
[7] 山陽

鋤柄俊夫

①……………播磨(兵庫西部)

食 膳 具

古代後Ⅲ期は円教寺薬師堂および小犬丸遺跡の資料に代表される。構成は、土師器高台付き杯または碗(1・2)・杯(3～6)、須恵器杯(7・8)である。底部にはほとんど糸切り痕が残る。1は杯形に「ハ」字状の高台をつけたもの、2は外上方に開く体部に高い高台をつけたもので、6は無高台であるが外観は2を意識したものである。いずれも畿内を除く全国でこの時期に特徴的な器形である。一方須恵器は体部を内彎させた高台付き碗および粘土円盤の底部から体部を積み上げていく疑似高台系の碗であり、後者の形は越窯碗に類似する。土師器とは対照的な関係にあることがわかる。

中世Ⅰ期以降については、宝林寺北遺跡の調査で体系的な整理がおこなわれている〔兵庫県教育委員会1987〕。同遺跡は龍野市に所在する11世紀中頃から13世紀前半にかけて墓地(方形周溝形墓)および5×3間の総柱建物をもつ集落遺跡で、石鍋、足釜、足鍋、石鍋転用温石、竈、スラグ、木製品(漆器)をはじめとして、12世紀の溝状屋外炉、土坑15から410gの炭化穀物(小麦または裸麦と少量のソバ)、土坑42から土師器44点の集中廃棄(12世紀)など多彩な遺構・遺物を検出している。

土師器は前代より続く高台付きの器形が、体部を内彎させて立ち上がる。杯は体部の傾きが緩やかなものとなり口縁部の調整も省かれる。疑似高台の製品は杯に加えて皿が見え、杯は底部の立ち上がりの低いものとなる。

須恵器はこの時期以降、中世Ⅲ期まで西日本に広く流通した碗がみられる。このうち特に東播磨の資料については、兵庫県教育委員会〔兵庫県教育委員会1983〕、平安博物館〔平安博物館1985〕、妙見山麓遺跡調査会〔妙見山麓遺跡調査会1985〕、丹治康明〔丹治1985〕、森田稔〔森田1986a・1988b〕、真野修〔真野1979〕等により、それ以外の地域の資料については宿原5号窯〔三木市教育委員会1986〕、緑風台遺跡〔西脇市教育委員会1983〕、森内秀造〔森内1986〕、中村浩〔大谷女子大学資料館1983〕等によって編年が整理されてきている。

変遷の特徴は底部際の調整と体部の形態にみられる。中世Ⅰ期からⅡ期前半において、体部は底部の周縁上部に積まれたのち、外上方へ巻き上げられ、内彎気味に立ち上がる。底部際は疑似高台状を呈する。体部中位から上半は器壁が薄くなるが口縁部は再び肥厚し端部は丸くおさめられる。中世Ⅱ期後半からⅢ期の体部は、底部から連続して巻き上げられ、外上方へむかい直線的に立ち上

図1 播磨(1)

图2 播磨(2)

がる。器高は減少し、焼成も軟質のものがみられる。

なお前代からつながる須恵器については、井根口遺跡（平安時代末期から南北朝期までの木棺墓を伴う集落遺跡）から出土した底部際の屈曲する資料(14)が、11世紀後半の年代を与えられた西脇市鍋子谷1号窯跡に比定されている〔兵庫県教育委員会1990〕。またこれら以外に、有安遺跡の柱穴群から丹波窯碗の出土も報告されており、井根口遺跡の場合、丹波窯の製品は遺物出土量の5%を占めるとされる〔兵庫県教育委員会1990〕。

土師器皿は手捏ね成形とロクロ成形があり、中世ⅡからⅢ期後半とⅤ期の手捏ね皿は京都を意識した形態をとる。

煮炊具

長谷川真〔長谷川1988〕、山仲進〔山仲1989〕、門前・上山遺跡〔中町教育委員会1992〕、集落内に鍛冶工房をもつ安富中学校前・安志遺跡〔兵庫県教育委員会1976〕、区画を持つ中世墓群で、近くに75m規模の館を配した大岡山遺跡〔兵庫県教育委員会1991〕での整理がある。

古代後Ⅲ期は奈良時代以来の長胴甕が器高を減少し、半球形で口縁部を「く」字状に外折させたもの(1)および、口縁部直下に短く厚い鏝を付けたいわゆる摂津型の製品(2)がみられる。

中世Ⅰ期は前代の2種に加えて体部に叩き調整を施した鍋が現れる。口縁部はナデにより外面に段が付けられ、端部は肥厚する。中世Ⅱ期は胴部最大径が中位より下がった位置にあり、口縁端部は内外方向へ拡張する。中世Ⅲ期は、胴部が球形を呈し併せて口縁部の屈曲が外折から直立へ転化する。中世Ⅳ期はこの系統の最後に当たる。体部は丸みのある底部から角度をもって内傾し、口縁部はほぼ直立する。Ⅴ期の鍋は直線的に外上方へのびる体部と受け部状の口縁部からなり、この体部の外斜が進む形で近世の焙烙につながる。

一方釜は中世Ⅱ期以来みられるものであるが、Ⅲ期までは外面の叩きも一部で、基本的には京都の釜を意識したものと位置付けられる。これに対して叩き鍋の変化に対応するようにⅣ期以降は、外面全体に叩きの施された製品が現れる。全体に球形を呈し、短い鏝は内傾する口縁部直下に付けられる。端部は肥厚して縁帯をもつものから、失われ尖り気味に仕上げられるものへ移行する。なお、この系譜にある浅鍋はⅤ期後半において大坂城跡、堺環濠都市遺跡などで煮炊具の一端を担うようになる。

②……………備前・備中・美作(岡山)

古代末から中世前期については、武田恭彰〔武田1990a・1990b・1991・1992・1994〕、鈴木康之〔鈴木1988〕、山本悦世〔山本1992・1995〕、平岡正宏〔平岡1993〕、鋤柄俊夫〔鋤柄1990・1993〕中世については福田正継〔福田1985〕の整理がある。図は備中を中心とし、11～14は美作の資料である。

食膳具

古代Ⅰ期には黒色土器碗、土師器杯、土師器高台付き杯がみられる。1は総社市三輪採集の黒色土器碗であり、体部の彎曲化した杯型として10世紀前半の新段階におかれている。2は奥坂遺跡出土の黒色土器A類碗であり、体部は内彎して立ち上がり「ハ」字状の高台をもつ。11世紀前半とされる。杯は体部が直線的で外上方へのびるもの(3)と法量が縮小し、体部の外反するものがみられ、前者は10世紀前半、後者は11世紀初頭に比定

图3 備前·備中·美作

されている。土師器高台付き杯は、やや外反する口縁部と高い高台を特徴としており、10世紀後半代の全国で共通してみられる形態を示す。

中世Ⅰ期を代表する資料に鴨方町の沖の店1号窯資料がある。いずれも成形はロクロにより、底部には回転糸切り痕が残される。体部は粘土紐巻き上げの後、横ナデまたは粗いヘラ磨きが施され、色調は黄白色および須恵器に近い灰褐色を呈する。時期は11世紀末～12世紀初頭と考えられている。

一方鹿田遺跡の資料と対比すると、この時期は同遺跡のA期に対応する。土師器碗は深く丸みのある体部をもち、内面はヘラ状の工具によるナデ調整の後、磨きが施される。また外面にも全面に磨きが施される。

中世Ⅱ期は鹿田遺跡のB～C-1期に対応する。碗は口縁部外面にヨコナデ、体部内面に不定方向のナデを施すものの、磨きは内外面の1面のものから磨きの施されないものもみられ、高台も縮小する。中世Ⅲ期は鹿田遺跡のC-2期に対応する。碗は全体に法量が減少し、技法の省略が著しい。土師器碗はこの時期で終息し、Ⅳ期以降は京都型を意識した土師器製品が備中を中心にみられる。

煮炊具

樋元遺跡（総社市）C地区〔岡山県教育委員会1986〕では14世紀の鍛冶関連遺構が多く検出され、ヘソ皿と土師器鍋が出土している。鍋は口縁部を「く」字状に外折するもので、内面は横位の刷毛調整、外面は体部が押さえ、底部が刷毛調整である。口縁端には浅い沈線がはしる。

園井土井遺跡（笠岡市）〔岡山県教育委員会1988〕は中世の屋敷地である。内耳鍋は口縁部が「く」字状に外折し、端部は丸く肥厚する。内耳は水平につけられている。鍋は口縁部が「く」字状に外折し、端部は上下方向へ発達した形態をもつもの、口縁部がく字状に外折し、端部が丸く肥厚して仕上げられたもの、丸い底部からほとんど外折することない口縁部がつくものも多く、他に口縁部が肥厚した断面方形のもの、および端部の発達のみられるものもある。また茶釜型土器と口縁を内傾した羽釜もみられる。

鍛冶屋遺跡（笠岡市）〔岡山県教育委員会1988〕出土の鍋は、口縁部が外彎して直線的でない。内耳鍋も形態は鍋と類似し、耳は省略の傾向により幅の狭いものになっている。羽釜は頸部が内彎して長いものがある。ほかに沖の店遺跡（鴨方町）〔岡山県教育委員会1981〕包含層から多量の室町時代在地土器が出土している。播鉢・鍋・内耳鍋・甕の分類が行われており、器種構成は概ね園井土井遺跡と同様である。

このように、鍋は口縁部が受け部状になるものと、「く」字状に外折するものに2分され、前者は京都型を意識したタイプで山間部に分布し、後者はひろく三国でみることができる。後者の変遷としては、古代後Ⅲ期が不明であるが⁽¹⁾、おそらく古代以来の長胴甕の延長上にあたり、中世Ⅰ期は器高を減少させながらも、直線的な胴部を持つ資料をみることができる。中世Ⅱ期は胴部が丸みを帯び、器高に対する口径の比率の大きな開いた器形となる。中世Ⅲ期はさらに口径を増し、胴部と底部の境に屈曲部を持つものもみられる。

中世Ⅳ期以降は亀山窯の製品が主流となり、口縁端部を肥厚させて端面に凹線状の成形が施される。端部は上下方向あるいは、端面をもつ段階で、面を水平面に近い緩やかなものにする場合は、外方に発達する。胴部は中位で「く」字状に鈍く屈曲し、口縁部の屈曲する位置に内耳をつける製

品も出現する。中世Ⅲ期からⅣ期への段階で画期がみられることになる。

なお土釜は細片が多く不明な部分が多い。頸部が長く内彎するものと、短く直立するものがあるが、前者は僅少であり、後者にしても煮沸具の主体的な位置にはないと思われる。

以上より、須恵器碗・土師器碗・ヘソ皿・手捏皿・摂津山城系鍋・内耳鍋・足鍋・釜・茶釜形土器の分類により分布を検討してみる。最初に12・13世紀であるが、備前・美作を中心とした須恵器碗と、備中以西でみられる土師器碗の分布が対比できる。いうまでもなく備前の東には須恵器を中心とする播磨があり、備中に西接する備後は、一般に早島式土器（土師器碗）の出土地域としてよく知られている。

一方共通する分布の製品をあげると、足鍋・内耳鍋・ヘソ皿・茶釜形土器はいずれも備中南部から備前西部にみられる。特に曾原天王山中世墓群を含む曾原遺跡〔岡山県教育委員会1980〕からは、大量の茶釜型土器および鍋類が出土しており注目される。時期的には内耳鍋と茶釜形土器が15世紀以降、ヘソ皿は14世紀代であろう。なおヘソ皿は、手捏ね皿を含めて草戸千軒町遺跡で出土しており、先に述べた土師器碗の分布と重複している。

③……………備後(広島東部)

食 膳 具

古代後Ⅲ期は、広島県福山市に所在するザブ遺跡に代表される〔鈴木1993〕。器種構成は土師器杯・高台付き杯、黒色土器碗、須恵器杯、緑釉陶器碗・皿である。

このうち土師器杯は、平らな底部から体部を外反ぎみにたち上げるものおよび、直線的に外上方へ立ち上げるものと、疑似高台状（低い柱状高台）の底部から直線的な体部を外上方へ立ち上げるものがあり、その一部は胎土も異なっている。いずれもロクロ成形で底部には回転ヘラ切りの痕跡が残る。黒色土器碗は、口径21cmの大型のA類碗である。底部には切り離し痕がみえる。10世紀前半とされる。

中世Ⅰ期は備後国府跡 SK725および SE618を指標とした。前者の器種構成は、須恵器杯(11)・碗(12)、土師器皿・碗(8)、黒色土器 A 類碗(14)であり、土師器、須恵器共に碗は口縁部を外反させ体部の丸い器形を呈する。11世紀中頃とされる〔広島県立埋蔵文化財センター1989〕。後者は土師器碗(6)・皿（京都型「て」字状）、須恵器碗(13)、黒色土器 B 類碗(15)、白磁碗から構成される。土師器碗は底部際の丸みが強く、一方須恵器碗は口縁部の外彎が外折となっており、同時に出土している別の須恵器碗においても外反が鈍くなっている。時期は12世紀前半とされる〔篠原1991〕。

中世Ⅱ期は備後国府跡 SE401および草戸千軒町遺跡の最古段階の資料に対応する。構成は、土師器杯（17・18）、須恵器杯(19)、黒色土器 A 類碗(21)および、掘り方から白磁碗が出土している。土師器杯は体部の直線的なものと内彎気味に立ち上がるものがあり、須恵器碗は疑似高台状の底部から内彎～比較的直線ぎみに立ち上がり、口縁部の屈曲の少ない形態を示す。いずれも前代より後出する特徴を示しており、時期は12世紀後半とされる〔広島県立埋蔵文化財センター1986〕。

中世Ⅲ期以降は草戸千軒町遺跡の資料にみることができ〔広島県立草戸千軒町遺跡調査研究所1993・1994〕〔鈴木1985・1989〕。それぞれ中世Ⅲ期は草戸千軒町遺跡のⅠ期、中世Ⅲ期後半～Ⅳ期前

図4 備後(1)

図5 備後(2)

半が同Ⅱ期，中世Ⅳ期後半～Ⅴ期前半が草戸千軒町遺跡のⅣ期に対応する。器種構成は全て土師器であり，碗・皿の2種となる。

碗は法量を減少させる形で時代を経，中世Ⅳ期に無高台で底部を押し上げたいわゆるへそ皿状あるいは大和型瓦器碗の末期の形態に似たものがみえ，中世Ⅳ期後半以降は碗形が完全に消滅し，浅く広がった器形の皿が主体となる。

Ⅱ期およびⅤ期に画期が求められそうである。

煮炊具

古代後Ⅲ期にみられる備後国府跡の土師器甕以外，中世Ⅱ期までこの地域の煮炊具は不明である。

中世Ⅲ期以降は，草戸千軒町遺跡の資料を基準としてその変遷をたどることができる。構成は鍋を中心にして，釜型，足鍋，茶釜型が加わる。鍋は口縁部を「L」字状に外折したものと，受け部状に成形したものの2種みられる。いずれも外面はタテハケ，内面にはヨコハケが施されている。この2種は中世Ⅲ期において明らかに区別できるが，中世Ⅳ期以降は亀山窯の製品が盛行するなかで，両者の中間的な口縁部形態を多くみるようになる。焼成は土師質，瓦質の両方がある。

①……………安芸(広島西部)

妹尾周三による安芸南部の編年案がだされている〔妹尾1989〕。古代後Ⅲ期は安芸国分尼寺跡推定地第3調査露掛西第3調査区の資料をみることができる〔広島県教育委員会1980〕。食膳具は高台付きの土師器・須恵器および土師器杯から構成され，いずれも直線的な体部またはやや内彎ぎみの体部を呈する。煮炊具は外面に刷毛調整を施した丸胴型の製品であり，類例が鷺田遺跡SB11から出土している〔広島県埋蔵文化財調査センター1989〕。

中世Ⅰ期は小越窯に代表される〔広島県教育委員会1983〕。この遺跡は東広島市の志和盆地を見おろす尾根鞍部に所在する。窯は煙道部から焚口まで4～5m程度で，燃烧部から焼成部への階差は約1m，平面形は逆三角形，断面は階段状の構造をもつ。なお東方5kmの丘陵で同様な窯が発見されている（旦ヶ原窯）。

出土遺物は断面が三角形の張り付け高台碗および皿である。碗は口径15～16cm，器高5～6cm，底径7～8cmで，底部には糸切り痕が残る。焼成は95%が酸化焰焼成であるが，窯体内面は還元化しており，本来の焼成は須恵器系が基にあるものと考えられている。6は灰原出土のもので，焼成は還元化を示し色調は灰色を呈する。体部の直線的な器形である。7は窯体内出土の資料で色調は淡灰白色を呈する。体部の彎曲した器形である。

中世Ⅱ期は道照遺跡〔広島県教育委員会1982〕，石佛遺跡〔広島県埋蔵文化財調査センター1990〕⁽²⁾，大槇1号遺跡〔広島県埋蔵文化財調査センター1993〕の資料に代表される。なかでも道照遺跡のSE04からは13世紀前半と思われる畿内系の瓦器碗を伴って在地の土師器杯が出土しており，年代を知る手がかりとなる。

8は土師器杯であり，器高は低く，体部は外方に広がる。なおこの遺跡では土器類以外にも下駄・碗を初めとする木製品の出土が多く知られており，注目される。12は土師器釜であり，口径29.5cmを測る。丸みのある底部から体部が直線的に立ち上がる器形を呈する。胴部外面にタテハ

图6 安芸

ケ、内面にヨコハケ調整がみられる。

なお、この時期および13世紀代の和泉型瓦器碗が鷲田遺跡・安芸国分寺跡推定地第2次調査、鏡西谷遺跡、道照遺跡、畝観音免第1号古墳、中垣内遺跡、備後国府推定地、石佛遺跡から出土し、石佛遺跡では瓦器碗の胎土分析も行われている〔広島県埋蔵文化財調査センター1989〕。

中世Ⅲ期は池田城跡〔広島県教育委員会1986〕、恵下山城跡〔広島県教育委員会1977〕などが知られる。土師器杯は体部中位が屈曲しながらも器高の高いものから、体部が外傾し、器高の低いものがみられる。14は土師器の釜である。ピット内の出土で東播の編年で13世紀後半に比定される須恵器播鉢と共伴する。体部外面はヘラナデ、内面はヨコハケが施される。体部は直線的だが外斜する状況を示す。

また池田城跡の土師器皿は底部の切り離しが糸切りのものとヘラ切りのものの両者がみられ、この地域が、周防地域と備後地域を中心的な特徴とするそれらの接点にあたるとされている。

中世Ⅳ期は池田城跡、横山城跡〔広島県埋蔵文化財調査センター1984〕をみることができる。24は土師器釜である。口径は25.4cmと推定され、体部は底部から大きく外方へ開く。外面にタテハケ、内面にヨコハケが施されている。中世Ⅴ期は伴東城遺跡をみることができる〔広島県教育委員会1989〕。土師器皿は、口径11cm、器高3cmを測り、器形は広く外上方に開く体部を特徴とする。この遺跡からは、16世紀代の備前窯播鉢が出土しており、土師器皿についても同様な時期が推定される。なお、土師器釜は体部が直線的に立ち上がり、短い鐔をつけたものがみられる。

ほかに上滝川1号遺跡からも、13世紀代と思われる畿内系瓦器碗の出土が知られている〔広島県埋蔵文化財調査センター1993〕。土師器杯は浅い器高と外上方に開く体部からなり、中には内彎ぎみにたちあがるものもみられる。また、煮炊具では土師器釜の破片が出土しており、口縁部の下がった位置に比較的整った鐔を有する。内面はハケ調整である。

⑤……………周防・長門(山口)

食 膳 具

平安時代終わりから鎌倉時代に盛行する白色の土師器碗を軸に、吉瀬勝康らによって在地土器の変遷が発表されている〔吉瀬1988〕〔森田1990〕。

古代後Ⅲ期は周防国府跡左郭南限域の調査SD105〔防府市教育委員会1979〕、第26次調査のSK123〔防府市教育委員会1984〕により代表される。SK123の構成は、土師器皿・高台付き皿(2)・杯(1)・疑似高台杯(3)・疑似高台碗(4)・高台付き碗(5)・高台付き杯および黒色土器A類碗(6)、緑釉陶器であり、いずれも「乾元通宝」を伴っている。成形においてほとんどの製品が底部ヘラ切りをおこなっているが、6については糸切りの痕跡が残されている。外反して開く杯および疑似高台杯と、東日本で言われる足高高台杯、および碗形態の組み合わせとして、10世紀後半の典型的な資料であろう。

10世紀末～11世紀前半のあいだで、底部切り離しの技法に糸切りが導入され、碗は内外面にミガキを施し、白色の胎土により成形されるようになる。この時期以降およそ13世紀代まで続くこの白色の土師器碗が防長地域の特徴的な土器食膳具となる。

中世Ⅱ～Ⅲ期の資料としては、周防国府跡SD104〔防府市教育委員会1979〕、SE129〔防府市教育委員会1981〕をみることができる。SE129の土師器杯は、体部の内彎した深い器形を呈す。白磁Ⅳ・

図7 周防・長門(1)

図8 周防・長門(2)

V類, 青磁四耳壺および瓦器碗を共伴し, 12世紀後半~13世紀はじめに比定される。SD104は12~13世紀代の遺物を5~7層にかけて含んだ溝で, 構成も青磁・白磁・常滑窯甕・瓦器碗など多岐におよぶ。碗は浅く開いた形態で, 断面三角形の高台をもち, 杯は器高を変えずに口径を減じた結果, 深い内彎ぎみの形態を呈す。なお, これ以降, 杯は長門国府跡 LW001(7)〔吉瀬1988〕のような深い形を経て, 中世IV・V期の皿型へ転化する。

中世IV・V期は大内氏館跡の資料に代表される〔山口市教育委員会1991〕。ロクロ成形の皿と手捏ね成形の皿がみられ, 前者は杯型から器高を減じ, 体部の傾きを増して転化し, 後者はV期後半になって忠実に京都の土師器皿を模してつくられる。

煮炊具

足鍋および鍋から構成され, 岩崎仁志によりその変遷が示されている〔岩崎1988〕。

古代後Ⅲ期は周防国府跡の資料を見ることができる。いずれも土師器であり, 球胴型の形態を呈するものと思われる。口縁部は「く」字状に外折し, 端部は玉縁状に仕上げられる。これ以降, この系統に直接つながる資料は不明であるが, 下右田遺跡からやはり球胴で口縁部を外折させた製品が見られ, その一部は中世I期に含まれるものとする。

中世II期以降, 器種は上記の系統と思われる鍋に加え, 足鍋, 鐙をもつ釜および足釜がみられ, それぞれ時代を経ていく。焼成は大半が瓦質である。口縁部を外折させた鍋は, 口縁部の長さを縮小させておおむね中世Ⅲ期まで続く。足鍋は中世II~Ⅲ期前半の段階で, 短く薄い口縁部と底部外面のハケ調整を特徴とし, 形態は体部の直立した箱形を呈する。

中世IV期にはいると, 足鍋の口縁部は厚みを増して端部を内側へ発達させる。体部は内彎ぎみを呈し, 底部外面には叩きが施される。これらの特徴は中世V期において顕在化し, 口縁端部は内折し, 次いで端部の拡張した断面方形を呈する。また体部は丸胴形あるいは直線的に外上方へ開く体部をもつ。この口縁部の特徴は, 中世IV期以降の鍋にもみられるものであり, 前代までの鍋が底部と体部の境に屈曲部をもっていたのに対し, この時期以降の鍋は丸底で体部はそのまま外上方に広がっている。また底部外面に叩きを施す点も足鍋と共通である。

このように防長の煮炊具では, 足鍋の出現するII期, 「く」字口縁の鍋が消えるIV期が変遷期とされよう。ところで防長系煮炊具の特徴は, このような足付きの形態と叩き成形にある。その系譜についてここで詳しく述べる余裕はないが, 同じ叩き成形をもつ資料として播磨と比較すれば, 形態的な面での関連はむしろ亀山窯系製品の影響を考えた方がいのかかもしれない。しかし足鍋・鍋の叩きにみる時期の整合性と逆に, 中世II・Ⅲ期にみられる足釜の叩き成形の系譜はその要件では説明できず, さらに安芸国に同様な製品のみみられないこともこの問題を解決するための障害となっている。なお石鍋は, 下右田遺跡などのほか山口県宇部市下請川南遺跡でも出土が知られている。

註

(1)——該期の明確な資料は少なく, わずかに海上がりの資料として, 錦海湾沖を発見地とする鐙付きの長胴甕をみることができる。出土状況がなにを成因としているものかは検討が必要であるが, あるいは摂津との交易に

ついても考えて良いのかもしれない。〔真鍋1991〕参照。
(2)——石佛遺跡からは13世紀後半頃の煙管状に類した土師器窯も検出されており, 同様な甲奴郡甲奴町小童の窯とあわせて注目される。

引用・参考文献

- 岩崎仁志 1988 「防長地域の足鍋について」『山口考古』第17号
 大谷女子大学資料館 1983 『札馬』
 岡山県教育委員会 1980 『本州四国連絡橋陸上ルート建設に伴う発掘調査報告書』I
 岡山県教育委員会 1981 『山陽自動車道建設に伴う発掘調査』2
 岡山県教育委員会 1986 『岡山県埋蔵文化財報告』16
 岡山県教育委員会 1988 『山陽自動車道建設に伴う発掘調査』4
 吉瀬勝康 1988 「周防における古代・中世土器の様相」『中近世土器の基礎研究』IV
 篠原芳秀 1991 「備後国府跡出土の土器」『研究輯録』I(財)広島県埋蔵文化財調査センター
 真野 修 1979 「魚住古窯址群 1・2」『歴史と神戸』18-1・3
 鈴木康之 1985 「広島県における中世土器について」『中近世土器の基礎研究』
 鈴木康之 1988 「鹿田遺跡出土の中世土器について」『鹿田遺跡』I
 鈴木康之 1989 「草戸千軒町遺跡Ⅳ期の土師質土器」『中近世土器の基礎研究』V
 鈴木康之 1993 「備後における古代末期の土器の様相」『考古論集』
 鋤柄俊夫 1990 「瀬戸内を中心とした終末期の須恵器」『中世土器研究』第58号
 鋤柄俊夫 1993 「岡山県における中世在地土器の分布とその領域について」『研究紀要』vol. 1 大阪文化財センター
 妹尾周三 1989 「広島県西部(安芸地域)の古代から中世の土器」『全国シンポジウム準備会』
 武田恭彰 1990 「古代土器生産についての一考察②」『古代吉備』第12集
 武田恭彰 1990 「岡山県における古代末期の土器様相」『シンポジウム「土器からみた中世社会の成立」』
 武田恭彰 1991 「吉備系土器碗の製作技法について」『中近世土器の基礎研究』VI
 武田恭彰 1992 「岡山県に於ける古代土器様相の再検討」『古代吉備』第14集
 武田恭彰 1994 「岡山県における回転土師器の成立と変遷」『中近世土器の基礎研究』X
 丹治康明 1985 「東播系須恵器について」『中近世土器の基礎研究』
 中町教育委員会 1992 『門前・上町遺跡』
 西脇市教育委員会 1983 『播磨・緑風台窯址』
 長谷川真 1988 「兵庫」『第7回研究集会報告資料』中世土器研究会
 兵庫県教育委員会 1976 『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告』
 兵庫県教育委員会 1983 『魚住古窯跡群』
 兵庫県教育委員会 1986 『相生市・緑ヶ丘窯址群』
 兵庫県教育委員会 1987 『宝林寺北遺跡』
 兵庫県教育委員会 1990 『井根口遺跡発掘調査報告書』
 兵庫県教育委員会 1991 『大岡山遺跡』
 平岡正宏 1993 「美作の古代末から中世の土器」『中近世土器の基礎研究』IX
 広島県教育委員会 1977 「高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』
 広島県教育委員会 1980 「安芸国分尼寺』
 広島県教育委員会 1982 「道照遺跡』
 広島県教育委員会 1983 『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(I)
 広島市教育委員会 1986 『池田城跡発掘調査報告』
 広島市教育委員会 1989 『伴東城跡発掘調査報告』
 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1993 『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』I
 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1994 『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』II
 広島県埋蔵文化財調査センター 1984 『横山城跡発掘調査報告』
 広島県立埋蔵文化財センター 1986 『備後国府跡-推定地にかかる第4次調査-』
 広島県立埋蔵文化財センター 1989 『備後国府跡-推定地にかかる第7次調査-』
 広島県埋蔵文化財調査センター 1989 「奥田・是石・鷺田・藤田』
 広島県埋蔵文化財調査センター 1990 『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(V)
 広島県埋蔵文化財調査センター 1993 『西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(II)
 広島県埋蔵文化財調査センター 1993 『上瀬川1号遺跡』
 福田正継 1985 「瀬戸内海中部北岸域の土師質碗について」『中近世土器の基礎研究』
 平安博物館 1985 『魚住古窯跡群発掘調査報告書』
 防府市教育委員会 1979 『防府市文化財調査年報』II
 防府市教育委員会 1981 『防府市文化財調査年報』IV
 防府市教育委員会 1984 『防府市文化財調査年報』VI
 真鍋篤行 1991 「瀬戸内海における海あがり考古資料調査報告(II)」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第6号

-
- 三木市教育委員会 1986 「宿原5号窯址発掘調査」『三木市埋蔵文化財調査概報 昭和50年度～昭和59年度』
妙見山麓遺跡調査会 1985 「神出」ほか
森内秀造 1986 「平安時代の窯業生産」『歴史における政治と民衆』
森田孝一 1990 「防長地方における瓦器の様相」『山口考古』第19号
森田 稔 1986a 「東播系中世須恵器生産の成立と展開」『神戸市立博物館研究紀要』3
森田 稔 1986b 「東播系中世須恵器の生産と流通」『中近世土器の基礎研究』Ⅱ
森田 稔 1988 「神出古窯址群の発掘成果」『神戸の歴史』第19号
山口市教育委員会 1991 「大内氏館跡Ⅷ 大内氏関連町並遺跡Ⅰ」
山仲 進 1989 「b東播磨の在地系土器」『神出1986』妙見山麓遺跡調査会
山本悦世 1992 「吉備南部における古代末～中世の土師器の展開」『中近世土器の基礎研究』Ⅷ
山本悦世 1995 「備前地域における古代後半の土器様相」『津島岡大遺跡』6 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
-

挿図文献

播磨

- ①龍野市教育委員会 1994 「布勢駅家」Ⅱ
- ②兵庫県教育委員会 1987 「宝林寺遺跡」
- ③兵庫県教育委員会 1988 「中後瀬遺跡」
- ④兵庫県教育委員会 1987 「小犬丸遺跡」Ⅰ
- ⑤兵庫県教育委員会 1990 「井根口遺跡発掘調査報告書」
- ⑥兵庫県教育委員会 1983 「魚住古窯跡群」
- ⑦兵庫県教育委員会 1989 「小犬丸遺跡」Ⅱ
- ⑧龍野市教育委員会 1982 「福田天神遺跡」
- ⑨龍野市教育委員会 1993 「小神芦原遺跡」
- ⑩加東郡教育委員会 1984 「家原・堂ノ元遺跡」
- ⑪神戸市教育委員会 1989 「日暮遺跡発掘調査報告書」
- ⑫兵庫県教育委員会 1990 「龍野城」
- ⑬中町教育委員会 1992 「門前・上山遺跡」
- ⑭兵庫県教育委員会 1991 「大岡山遺跡」
- ⑮赤穂市教育委員会 1991 「有年原・田中遺跡」

備前・備中・美作

- ①武田恭彰 1990 「古代土器生産についての一予察(2)」『古代吉備』第12集
- ②鈴木康之 1988 「鹿田遺跡出土の中世土器について」『鹿田遺跡』Ⅰ
- ③平岡正宏 1993 「美作の古代末から中世の土器」『中近世土器の基礎研究』Ⅸ
- ④岡山県教育委員会 1988 「山陽自動車道建設に伴う発掘調査」4
- ⑤岡山県教育委員会 1989 「友野散布地中原遺跡ほか」
- ⑥岡山県教育委員会 1986 「岡山県埋蔵文化財報告」16
- ⑦北房町教育委員会 1986 「谷尻遺跡赤茂地区」
- ⑧岡山県教育委員会 1988 「本州四国連絡橋陸上ルート建設に伴う発掘調査」Ⅱ
- ⑨岡山県教育委員会 1978 「二宮遺跡」
- ⑩備前市教育委員会 1984 「亀戸廃寺確認調査報告」

備後

- ①鈴木康之 1993 「備後における古代末期の土器の一例相」『考古論集』
- ②広島県教育委員会 1982 「渡瀬遺跡」
- ③広島県立埋蔵文化財センター 1989 「備後国府跡—推定地にかかる第7次調査—」
- ④篠原芳秀 1991 「備後国府跡出土の土器」『研究輯録』Ⅰ
- ⑤広島県立埋蔵文化財センター 1986 「備後国府跡—推定地にかかる第4次調査—」
- ⑥広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1993 「草戸千軒町遺跡発掘調査報告」Ⅰ
- ⑦(財)広島県埋蔵文化財調査センター 1984 「山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(Ⅱ)
- ⑧広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1994 「草戸千軒町遺跡発掘調査報告」Ⅱ

安芸

- ①広島県教育委員会 1980 「安芸国分尼寺」
 - ②広島県教育委員会 1983 「山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(Ⅰ)
 - ③広島県教育委員会 1982 「道照遺跡」
 - ④広島市教育委員会 1986 「池田城発掘調査報告」
-

-
- ⑤(財)広島県埋蔵文化財調査センター 1990 『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(V)
 - ⑥(財)広島県埋蔵文化財調査センター 1993 『西条第1土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(II)
 - ⑦広島県教育委員会 1977 『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』
 - ⑧広島市教育委員会 1989 『伴東城跡発掘調査報告』
 - ⑨(財)広島県埋蔵文化財調査センター 1993 『寺家城遺跡・近信遺跡』
 - ⑩広島市教育委員会 1986 『北谷山城跡発掘調査報告』
 - ⑪(財)広島県埋蔵文化財調査センター 1984 『横山城跡発掘調査報告』

周防・長門

- ①吉瀬勝康 1988 「周防における古代・中世土器の様相」『中近世土器の基礎研究』IV 防府市教育委員会 1984
『防府市文化財調査年報』V, 防府市教育委員会 1979 『防府市文化財調査年報』II
- ②防府市教育委員会 1984 『防府市文化財調査年報』VI
- ③山口県教育委員会 1980 『下右田遺跡第4次調査概要』
- ④防府市教育委員会 1981 『防府市文化財調査年報』IV
- ⑤防府市教育委員会 1979 『防府市文化財調査年報』II
- ⑥山口県教育委員会 1993 『仏供田遺跡』
- ⑦山口県教育委員会 1984 『上辻・大歳・今宿西』
- ⑧山口市教育委員会 1991 『大内氏館跡Ⅷ 大内氏関連町並遺跡Ⅰ』
- ⑨周防国府跡調査会 1993 『周防国府跡』
- ⑩山口県教育委員会 1991 『妙徳寺古墳 妙徳寺山経塚 栗遺跡』
- ⑪岩崎仁志 1988 「防長地域の足跡について」『山口考古』第17号